

『オセロー』考：デズデモーナの死後の命
On *Othello*:

Thoughts on Desdemona's Possible Life after Her Death

ウォーターズ 雅代

WATERS Masayo

Othello is one of the great four tragedies written by Shakespeare. *Othello* is a brave general with dark skin who has just married Desdemona, a most beautiful, thoughtful young Venetian lady. An ancient named Iago who *Othello* had trusted as being a loyal man, wanted to be a lieutenant, but to his disappointment *Othello* gave the position to Casio. Iago's hatred towards *Othello* and Casio schemed a plan of revenge using Desdemona as a means for his revenge. His plan works and *Othello*, believing of his wife's infidelity with Casio, finally strangles Desdemona. Later when he finds out the truth, he then kills himself. There are people who believe in another life after death or that our lives here in this world are linked to our previous lives. Some believe this, others do not. Quite simply, I do and this is what I argued in this paper.

1. はじめに

人は誰でもいつかは死を迎える。肉体の死をもってその人間のすべてが終わると考える人もいれば、いわゆる魂という存在を信じる人たちもいる。この世で魂の入れ物とも言うべきその肉体が、病気、事故、老化といった事情でそれ以上の使用に耐えられなくなったときに、魂はその体から離れるという考え方がある。人はどこから来て、この肉体というスーツを着込み、その人生を生きて、やがてはそのスーツを捨ててどこへ行くのだろうか。

シェイクスピアの四大悲劇の一つである『オセロー』を題材に、登場人物の死によって終結するこの物語の、その死後について私なりの考察を試みた。

2. 『オセロー』物語のあらすじ

ムーアの黒人の武将であるオセローは、結婚したばかりの若く美しい妻、ヴェニス
の議官である有力者の娘、最愛の妻デズデモーナを絞殺してしまう。

ありもしない妻の不貞への嫉妬と、そのありもしない妻の裏切りへの制裁と、自らの
行為を正当化し、妻を殺害する。オセローをこのように激しい嫉妬の鬼へと仕立て上
げるのは、イアーゴーという、オセローが誠実な部下だと信頼して疑わない旗手であ
る。イアーゴーは自分こそオセローの副官になれるものだと信じていたが、オセロー
はキャッシュという若くハンサムな男を副官に任命する。町の有力者三人が、副官に
イアーゴーを推薦したのにも拘らず、オセローは既に、キャッシュを副官にすると決
めていた。イアーゴーは激しくキャッシュに嫉妬し、そして自分の価値を認めないオ
セローを心のそこから憎み、その怒りは日々増殖する。 デズデモーナは、若く美し
いだけでなく、聡明なうえに思いやりにあふれた素晴らしい女性である。この世の善
という善を一身に集めたような、すべての恩恵を受け光り輝いているような人である。
イアーゴーは、そのデズデモーナをオセローとキャッシュへの復讐の小道具として利
用し成功する。

オセローはイアーゴーによって吹き込まれた話をつなぎ合わせて、デズデモーナと
キャッシュの不貞の妄想を抱き、それを信じ込んでデズデモーナを絞殺してしまう。
しかしその後すべてがイアーゴーの悪巧みだったと暴露されると、オセローは喉を刺
して自殺してしまうのであった。

3. 物語中のイアーゴーの役割

イアーゴーの役割は非常に大きく、一見、オセロー、デズデモーナ、キャッシュな
どの主な登場人物が、皆イアーゴーの操り人形のように、イアーゴーの思うように行
動していくかのように思われる。イアーゴーの狡猾さ、悪魔的な人を陥れる技は天才
的ともいえる。まるで獲物を待つ蜘蛛が仕掛けた蜘蛛の巣のような罠に、オセローも
デズデモーナもキャッシュも、どんどん引っかかってしまう。オセローを妄想による
嫉妬の虜にする段階は、思わせぶりに会話の間を置くことや、オセローの言葉を繰り
返し口にするすることで、オセローの妄想が根拠を持たない確定的な思いへと変化してゆ
く心理状態を、まるで分析医のようにじっくりと観察しながら、復讐の包囲網を徐々
に狭めていく。表面上は誠実な信頼できる男を装いながら、相手に気づかれないよう

に、少しずつ確実に、毒を与え続けることができる、恐ろしい人間である。

イアーゴーによって設定された、最愛の妻の不貞という疑惑に取り付かれたオセローは、どんどん疑惑の泥沼へと落ちていく。最初はイアーゴーに引きまわされているように思われるオセローであるが、実は、自らがそうと選んでその深みへと入り込んでいく。イアーゴーは「人間、あなるのも、こうなるのも、万事おのれ次第だ。」という非常に重みのある台詞を言うのだが、これを読むとイアーゴーに操られているように見える登場人物たちは、誰もがそれぞれの問題の分岐点になるような決断をする場面で、自らの意思によって、イアーゴーの望む方へとすすみ、結果としては良くない道を選んでいく、ということの意味が、重みを増してくる。イアーゴーに操られているかのように見える登場人物たちの言動に、時に不快感を覚えたが、それは真実が必ずしも快い事ばかりではないという、現実的な事柄に密接にかかわることであるから、あまりにリアルであるがため、とも言えるのではないだろうか。このイアーゴーのような病的な作為をする人間は、実際、世の中に時代や場所を問わず、存在する。だまされるのは、まさか自分を陥れる人間がいるとは、考えた事もないような善良な人たちである。イアーゴーの悪事は、最後にその妻のエミリアによって暴露されるのだが、陥れられたオセローとデズデモーナは二人とも死んでしまい物語りは終わる。

4. デズデモーナ殺害への経過と背景

嫉妬に狂ったオセローに、デズデモーナは本当にあっけなく殺されてしまう。若く美しく聡明で、その上思いやりがあるという、非の打ち所のない素晴らしい女性が、その夫に絞殺されてしまう。彼女は、この年齢も家柄も人種も違うオセローを一途に愛し、信頼し、彼と結婚するために、父親に勘当されたも同然に家を出た。彼女には、なんらやましい事も、引け目に思う事もない。むしろ年齢やその肌の色のことで引け目を持っていたのは、オセローのほうであったのかもしれない。高嶺の花と思っていたデズデモーナを獲得した勝利に酔いしれる歓喜の雄叫びとは裏腹に、心のどこかで、信じられない幸福を信じきれない、ひねくれた信号を出し続ける発信機が作動していた。劣等感か、或いは、そこから生まれる深い不信感だろうか。明るい温かい家族と世の中の愛に、生まれた時からつまれて育ち、およそ悪巧みや嫉妬などとは縁のない生活をしてきたデズデモーナには、その信号を読み取る受容器がないので、なかなか感知できない。

イアーゴーは、そのオセローの発信機の信号音を難なく聞き取ったのだ。そのオセローの引け目を察知したイアーゴーは、計画をたてる。自分の評価を誤って、自分を差し置いてキャシオーを副官にしたオセローへの復讐、その人事の件にはなんの関係もないデズデモーナを利用して、オセローはもちろん、憎いキャシオーへも思い知らせてやろうと悪巧みをし、実行に移していく。オセローは彼の心の暗い部分を、イアーゴーに握られてしまった。

しかし、オセロー自身が意識していないが、イアーゴーには読まれてしまっている、その闇の部分、デズデモーナは受け入れていた。

聡明な彼女は、勿論、そんなことは承知でオセローを愛し慕い、また大きな慈悲の心で包んでもいたのである。

イアーゴーの妻、口の悪いエミリア風に表現すれば、「あの罰当たりの大ばか者、生まれも育ちも最悪で、どこの馬の骨だか、わかりゃあしない。自分じゃあどこかの王族の出だなんて、言ってるけどね、なんせムーア人の言うことさ、わかるものかね。父親はもちろん母親の顔さえしらず、物心がついたころには、裸でごみを漁っていたという、大泥棒の大嘘つき、食あたりで死にもしない丈夫な、犬ころ並みの、何だっけ食っちゃう胃袋と、腕っ節の強さとで、奴隷に売られたって逃げ出したのさ。食べ物盗みながら生き延びて、いつの間にか戦となれば大活躍さ、そりゃそうさ、だってヒビ並みに見境もなく相手を八つ裂きにする冷血漢、人間じゃないね。あのオセローっていうムーアの野郎。」という、オセローのあまりにも過酷な過去の生活環境。貴族の娘として何不自由なく育ち、美貌と頭脳も優しさも持ちあわせたデズデモーナにはオセローを愛しながら、オセローの、その変えられない過去の辛さをなんとか癒してやれたならば、という思いがあったのではないだろうか。

イアーゴーの仕組んだ悪巧みのひとつの、オセローが彼女に与えた母の形見のハンカチをどこへやったのかという件で、異常に責められても、嫉妬に狂った夫の、彼女には到底理解できない言動にも、デズデモーナは腹をたてず、一度はそんなオセローを恨んだ自分を責める。ついには殺されるその時にさえ、命乞いをする彼女を、もはや獣のようになって殺す夫を、それでも尚、彼女は責めずに庇っている。

5. デズデモーナの 生から死への移行

オセローの手は容赦なく彼女の首を締め付け続け、もう目の前が暗くなってきて、デズデモーナには、彼女が生まれたときからは言うに及ばず、生まれる以前のことも含めて、今までのすべてのことが、絵巻のように目の前に見えている。母の胎内に宿ったときの記憶、あるはずのない記憶、彼女の誕生を待ちわびる父と母のなんと若々しいことだろう。

自分を殺した夫を責めず、こうなったのは自分のせいだと思いながら、デズデモーナの魂は、静かに彼女の遺体の上、寝室の天井のあたりに浮かんで、たった今までの、あの息ができない肉体的な苦しみから解放され、自分の遺体の上で狂ったように叫んでいる夫の姿をみている。そして同時に彼女は、今までのいきさつをすべて本のページをめくるように順を追って見ている自分に気がついた。

しかし、本を読むよりも遥かに速いスピードで見ることができた。 不思議なことに、過去のすべてがものすごいスピードで再現されていくのだが、彼女にはその過去の出来事にかかわった人たち一人一人の、その時の心の中の様子までもが、同時に見えた。すべてのことを瞬時に脳にダイレクトに書き込まれているかのようなのだが、もはや肉体を持たないので、意識だけが大量の情報を受け止めているようだ。彼女は死んだのだ。

6. 死による覚醒と前世の記憶

オセローの不可解だった言動の理由も、イアゴーの悪巧みも、またその嫉妬の理由もあつという間に理解してしまった。彼女は突然自分が何であったのか、この、今終えたばかりの人生が何であり、その前は何であったのかを悟った。彼女は、その前の人生でも、オセローと一緒に生きていた。夫婦ではなく、彼女という存在はその時は母親で、オセローの前世の存在は娘だった。行きずりの旅芸人に恋をした娘を、潔癖な母親は激しく責め、娘は家を出て男についていくが、旅先で流産してしまい、男には足手まといにされ、看病もされず、若く無知なまま、ひとりっきりで行き倒れて死んでしまった。それを知った母親はその後の人生を後悔と罪の意識にさいなまれて送った。デズデモーナは今の人生の中で、そのまた前世で、彼女が人生の課題として学びきれなかったことをようやく修了、つまり終えることができたのだ。それは、

疑われてもだまされても、相手を信じ、裏切られ傷つき、それでも相手を許し愛し続けることで、相手のすさんだ心に人間としての成長を促すというものだった。しかしそれは、このようにオセローに殺される事によって成就するものではなかった。彼女には子供を生む能力がなく、その後の人生で、彼女は孤児院をつくり、戦争で親を失い、悪の道に走った少年刑務所の子供たちを、私費を投げ打って建設した孤児院に引き取り、育て、愛し、教育を与え、仕事につけるように技術を与えるという役目があったのだ。ところが、あっさりと殺されてしまったのは、オセローがあまりにも興奮しやすい部分をもって生まれてきてしまったためと、彼女があまりにもか弱かったという、彼女には計画外の出来事だったが、自分を殺す相手を許すというのは、飛び級をして卒業するくらいの評価に値するので、おおむね、彼女の今回の人生は、課題をクリアできたといってよいだろう。しかし、と彼女は高いところから、光り輝く存在の声を聞いた。彼女は、謀らずもオセローに妻殺しという業罪をおこなわせてしまったのである。

7. デズデモーナの死後の命

デズデモーナだった魂、または生命体は、オセローがもうじき命を絶つということを知っていた。そのすぐ近くに生前は父親だった存在が、寄り添っていることに気がついた。母だった存在も一緒だった。デズデモーナには、もはや悲しみも、後悔も、自責の念も、いわゆる感情のようなものは、一切なかった。淡々と、これから死にゆくオセローの、この次の人生について、今度は今までのように一緒になることはないかもしれない、と感じていた。オセローが、今回の彼の人生で、その辛く苦しい幼年期を生き抜いたのは、自らの不屈の精神力だ。その根底にあったゆるぎない生への自信は、世の中の愛を知らないオセローの場合、自らの腕力と正義感と、逆境の中で生かされているという自覚と、彼独自の信仰心に基づいた価値観でもあった。過酷な環境を生き延び、自らの命をかけても、部下たちの命を幾度となく救ったオセローは、人生の後半を、巡り合うべくして出会った前世からの魂の伴侶、デズデモーナと一緒に、恵まれない孤児たちを救うはずだった。自分がその子供達の親の命や財産や土地を、たとえお上からの命令とはいえ、戦争という殺人方法で奪ってしまったが故に、彼は多くの子供たちの人生を変えた。孤児となり盗みや放火をする、子供でも放っておけば、いずれ、危険な大罪を犯してしまうかもしれない子供たち。オセローとデ

ズデモーナの代償を求めない献身と大きな愛で、真っ当な人間として育てゆく予定だった。しかし今回のオセローの殺人と自殺で、これらの未然に防げた将来の犯罪にも、オセローとイアゴーは責任をおっていかなければならない。

8. そして 再生への道

今度また会えるのは、一体いつの事であろうか、とズデモーナだった魂は、うろたえているオセローの頬にそっと、今は肉体の伴わない手のひらをあてた。オセローの魂とは、今回の一件で、今後行く場所が違ってしまった。しかし、本当にまた一緒に生きることで魂が成長していくのなら、その間お互いに何度すれ違って生まれ変わっても、いつかまた必ずめぐり合う、ということ、彼女の魂は知っていた。今は男性でも女性でもなく、若くも年老いてもいない、光そのもののような存在だった。今終えた人生で父母だった魂が待っていたということは、なにか三人でまた同じ時代に生まれ、影響しあって生き、魂の成長を続ける計画があるのだろうか。オセローのことは、もう彼女の魂にはほとんど係りの無いことのように思われてきた。

と、はるか上のほうから、来なさいというメッセージが、彼女とその両親だった光る存在に瞬時に伝わった。オセローがズデモーナの名を祈りのように狂おしく、心の中で絶叫しながら、その喉をかき切る様子が、下方にみえたが、それもほんの一瞬で、あっという間に、高く高く、上へ上へと、大きな光り輝く、愛に満ち溢れた、エネルギーの中へと吸い寄せられるかのように、猛スピードで昇っていった。

【参考文献】

シェイクスピア・福田恒存訳 『オセロー』 新潮文庫、1973

ブライアン・L・ワイス著・山川紘也・亜希子訳 『前世療法』 『前世療法』 PHP 文庫、1997

ブライアン・L・ワイス著・山川紘也・亜希子訳 『魂の伴侶』 PHP 文庫、1997

飯田史彦著 『生きがいの創造』 PHP 文庫、1999

E・キューブラー・ロス著・鈴木晶訳 『「死ぬ瞬間」と死後の生』 中央文庫、2001

立花隆・著 『臨死体験』 文芸春秋、1994